

「はしか（麻疹）」

麻疹は一般には「はしか」として、よく知られています。麻疹はワクチンができる前は、一生のうちに必ず罹る病気の一つでした。今でもワクチン接種がいきわたっていないため、流行がみられます。罹り初めは風邪のような症状です。発熱、咳や鼻汁、目やにも出てきて不機嫌な状態が数日続いた後、少し熱が下がったような日を挟んで、発疹とともに高熱が出ます。この状態が数日続いたのち、熱が下がり発疹も茶色く変色しながら治っていきます。経過は合併症がなくても1週間はかかります。合併症も多く、入院を要することも少なくありません。合併症で多くみられるのは、中耳炎、肺炎、喉頭気管支炎です。止血作用のある血小板が減少しておこる紫斑病もまれではありません。1000~2000人に1人急性脳炎をおこすこともあります。また乳幼児期に麻疹にかかった後に、数年経って知的障害と痙攣をおこし、死に至る「亜急性硬化性全脳炎」は、100万人に1人発症すると言われています。

残念なことに麻疹そのものの治療法はありません。ですから予防することが大切です。麻疹ワクチンの有効性は90%以上認められ、生後12~90ヶ月未満の間に公費負担で受けることができます。もしワクチン接種を受けていない子どもが、麻疹患者に接触した場合には、接触後3~5日以内にγグロブリンの注射を受けることで、一時的に発症を予防することができます。発熱してからγグロブリンの注射を受けても効果はありません。予防効果は一時的なので、3ヶ月後には必ずワクチン接種を受けましょう。

「恋の病ははしかのようなもの」といわれるように、はしかは誰でもが一度は罹る、一過性の熱病として、けれども時には命を脅かす病気として知られています。また、はしかは、昔から熱とぶつぶつの発疹がでる子どもの病気の代表でした。そのため熱と発疹の出る病気で、はしかに似ていてはしかよりも軽いのを、俗に三日はしかと呼ばれることがあります。患者さんが三日はしかというものの中には、突発性発疹や風疹、時には夏風邪であったりします。

はしかに罹れば二度とかからないと言われているのに、二度三度はしかにかかったという人がいます。これははしかと他の発疹の出る病気を混同してしまっていることが多いようです。ですから発疹がでたからといって、はしかと決めつけずに、きちんと診断してもらう必要があります。三日はしかは本当のはしかと違うので、はしかの免疫はできていませんから、はしかの予防接種が必要です。

ある調査では、こどものはしかを経験してないお母さんは、はしかのことを軽く考えて

いるのに対して、子どもがはしかになった経験をもつお母さんは、声をそろえて大変だったと感想を述べています。わたしも、子どもが1歳になったときにはしかにかかり、看病した経験がありますが、それは大変でした。高熱が続き、全く食べなくなって、ぐったりするし、不機嫌で夜も寝てくれなくて、夜中負ぶってずっとあやしていました。2度とこんな想いはしたくなくて、2番目の子どもには1歳になると同時にはしかの予防接種をしました。

はしかの罹り初めは風邪のような症状ですが、この時期に既に感染力があります。ですから知らない間にうつっていることが、多くみられます。日本のはしかの予防接種率は高いとは言えず、日本で知らない間にうつって潜伏期間に海外に行ってから発症する場合もあって、はしかの輸出国と汚名を着せられています。

はしかに罹ると風にあてると重症になるという言い伝えがあるようです。とくにおばあちゃんが、付添で来られた場合には、夏の暑い日にも「風にあてないように窓を閉め切っている」と言われることがあります。暑さのため看護のお母さんもぐったりの様子です。発熱時に風にあたると寒気がしてよくありませんが、快適な環境は、不要な体力の消耗を防ぎます。居るだけで体力が消耗するような暑い部屋は、子どもにとってもよくありません。「はしかで入院した場合でもエアコンの効いた部屋に入ってもらっていますよ」と説明しますと納得されます。